

接続助詞「から」と「ので」の違い

—「丁寧さ」による分析—

山本もと子

キーワード：丁寧さ、面目、相対的力関係、社会的距離、会話がされる場面

要旨

原因・理由の接続助詞「から」と「ので」の意味と用法の違いは、これまで永野(1952)以来「から」は原因・理由を主観的に説明するものであり、「ので」は因果関係を客観的に描写するものであると分類されてきたが、未だ統一的な見解に至っていない。本論では、これらの意味と用法の違いはBrown and Levinson(1978, 1987)が論じる「丁寧さ」のストラテジーによって生じるのではないかという仮説を立て、シナリオや漫画などにおける日常的な会話では「から」と「ので」がどのように使い分けられているかを検証する。その分析をもとに、これらの違いは話し手が聞き手や話している場面や発話内容に応じて、無意識に表現の使い分けをしていると結論付ける。

1. はじめに

本論の目的はBrown and Levinson(1978, 1987)の「丁寧さ(politeness)」の議論を土台として、日本語の原因・理由の接続助詞「から」と「ので」の意味と用法の違いを分析することである。この違いは、永野(1952)以来今日まで、多くの言語学者によって語彙的多義性の問題として議論されてきたが、未だ統一的な見解に至っていない。本論では、これらの意味と用法の違いが、今まで論じられたように主観的か客観的かによって分類されるのではなく、Brown and Levinsonが論じる「丁寧さ」が関係しているという観点から議論する。

丁寧さとは、円滑なコミュニケーションの為に話し手が聞き手に示す心配りである。従って、日常のコミュニケーションにおいて、伝達内容そのものはもちろん、それを聞き手にどのような言語表現で伝えるかということも極めて重要になってくる。Brown and Levinsonは、発話行動で人が相手とやり取りをする時の行為を「相手の面目を脅かす行為」と考え、話し手はできる限り聞き手の面目を傷つけないように様々なストラテジーを使用していると主張している。(p.61-64) 聞き手や場面や発話内容に応じて、どのストラテジーを使って丁寧さを表現するのが適当であるかについては、話し手と聞き手が所属する文化や社会によって異なる。例えば、社会的立場の上下関係を重んじる日本では、

聞き手と距離を保つストラテジーがよく使用されている。

本論では、第一に、ある留学生用テキストから「から」と「ので」の文法説明を抜粋し、第二に、「から」と「ので」の分類として代表的な先行研究である永野（1952）の論文を紹介し、第三に、Brown and Levinsonのいう「丁寧さ」とはどのようなものかを分析し、第四に、実際の会話ではどのように使われているかを小説や漫画を題材にして検証する。最終的には、主観的か客観的かによって「から」と「ので」を分類している永野説は、Brown and Levinsonのいう「丁寧さ」が根底にあると結論づけられる。

2. 留学生用テキストにおける「から」と「ので」の分類

ある日の日本語補講（信州大学留学生センター主催、伊那地区、中級）で、1冊の初・中級の留学生用テキスト（『どんなときどう使う 日本語表現文型200』, 2000, アルク）を用いて「原因・理由」の章（p.39-48）を学習している時だった。1人の留学生（農学部大学院生、国籍：ハンガリー、男性、在日2年以上、日本語能力検定2級レベル）が「テキストの説明は間違っているのではないか？」と疑問を投げかけてきた。そのテキストでは、接続助詞「から」と「ので」の用法の違いを次のように説明していた。（p.40-43）

★～から

- ①スープが熱いから、気をつけて持っていきなさい。
- ②納豆はきらいだから、食べたくないんです。
- ③（駅のホームで）電車がまいりますから、ご注意ください。
- ④A：どうして冬が好きなんですか。
- ⑤B：スキーができるからですよ。
- ⑥この箱、捨てないでね。後で使うから。

<ポイント>

1. **（原因・理由）から、…。** 文末には、話す人の意志を表す文（「～たいです」「～つもりです」など）や、働きかけの文（「～なさい」「～てください」など）がくることが多い。
2. 依頼や断りの話を始めるときには、強く聞こえるので「～から」は使わないほうがいい。

例：△辞書を忘れたから、ちょっと見せてくださいませんか。

○辞書を忘れたんですが、ちょっと見せてくださいませんか。

★～ので

- ①きのうは2時まで寝られなかったので、けさは早く起きられませんでした。
- ②お風呂が熱いので、少し水を入れました。
- ③冬休みに家族に会いました。みんな、元気だったので、安心しました。
- ④あしたは休みなので、友だちと映画を見に行きます。
- ⑤すみません。ちょっと寒いので、まどを閉めてくださいませんか。
- ⑥今、調べていますので、少しお待ちください。

<ポイント>

1. (原因・理由) ので、…。 後ろの文で結果やなりゆきを言うことが多い。文末が命令形や禁止形の文はこない。
例：×うるさいので、やめろ。
○うるさいから、やめろ。
2. 個人的な言いわけを述べる場合には、「～ので」のほうが「～から」より改まった柔らかい表現である。
3. 「～のです」の形では使わない。
例： A：どうして冬が好きなのですか。
×B：スキーができるのです。
○B：スキーができるからです。
4. ⑥のように、より丁寧に言いたいときには、丁寧に接続することもある。

留学生の主張は、「日本人は『ので』の例文でも『から』を使って言うことがある」であり、確かに、②の例文など「から」でも言うことができる。

‘②おふろが熱いから、少し水を入れました。

では、「から」と「ので」はどのように違うのだろうか。留学生が混乱しないように正しく用法の違いを説明するには、この二つの接続助詞の相違をより明確に説明できなくてはならない。そこで、次に先行研究ではどのように分類されているのか、代表的な論文の分析を考察する。

3. 先行研究：永野（1952）

永野（1952）は『『から』と『ので』とはどう違うか』の中で、「ので」と「から」の意味と用法の違いを次のように分析している。(p.33-37)

1. 推量（想像・推測）、見解（意見・主張）、意志（意向・決心）、命令（禁止）、依頼（懇願、勧誘）、質問の意味を含む文が次に来る時には「から」を使うが、「ので」は使わない。これらはすべて話し手の主観に関する事柄の表現であり、話し手の主観に基づく表現なのである。つまり、語られない前は話し手の心の中だけにしか存在しないものなのである。そこで、話し手は聞き手に納得し理解してもらうために、それ相応の根拠や理由を示すことが必要になる。
 - ・（推量） 柚木は肩が悪いそうだから、きょうはやはり武末じゃないかな。
 - ・（命令） 危ないから、もっとあっちへ行ってなさい。
2. 結果や帰結を先に述べて、原因・根拠・理由などを後から説明的に述べる言い方は「から」しかない。すなわち、「AだからBである。」をひっくり返して「Bである。なぜならば、Aだからだ。」とすることができるのは、言わば、Bが主題であってAはその解説だからである。さらに言えば、BとAは相互に独立性が強く、本来別々の二つのものであって、それを話し手が自らの主観の責任において結びつけているのである。
 - ・でも、あなたのおっしゃる時間には参れません。母か兄かが楽屋口まで迎えに参っているからですの。
 - ・ヒトラリズムやプロレタリア独裁の信奉者にとってこの書が面白くないのは当然であろう。それ

らに対してこの書は鋭い一撃を食わせているからである。

3. 理由だけ述べてその帰結を言外に暗示するか、またはその帰結に基づく行動の推薦に直結させる言い方（終助詞的な用法）は「から」しかない。これで見ても「から」によって持ち出される条件は、条件としての独立性が強く、主観的な理由の説明として使われていることがわかる。
 - すぐ持って行きますから…。
 - 少しだから、と面倒がって残り火を粗末にすることは最も不経済です。
4. 「から」は「は」「こそ」「とて」などの係助詞や、「といて」などをつけて、特に理由を提示して課題の場を設定する用法がある。すなわち、何かの理由となるような事柄を提示して、その解決を強く期待させるような場を構えるわけである。

そうして、その理由に対する帰結や結論は、その課題を解く人の主観によって決定されているのである。こういう使い方は「ので」には全くない。

 - それだからこそ、オドールさんもいろいろ気をつかっているのでしょう。
 - あたまかが足りないからって、野球はやめるわけにいきません。
5. 「ので」の後に来る文は、ほとんどが自然現象・物理的現象などの記載、社会事情の記述、生理的現象の描写、心の動きの客観描写、行動の客観描写、事物の様子などの客観的叙述である。これらはすべて、主観を超えた現象や事柄を叙述したものであり、しかも、事象をありのままに客観的に描写したものばかりである。
 - （自然現象・物理的現象）水分が1グラム蒸発するために、少なくとも539カロリーの熱を自分自身が燃えて出した熱量でまかなうので、鍋釜にゆく熱がそれだけ減じます。
 - （生理的現象の描写）あんまり働いたので私はとうとう病気になってしまい、畑にも田にも出ることができなくなりました。
6. 将来のことは判断や推論の根拠とすることはできても、まだ事実として存在するわけではないから「から」は使えるが、「ので」で条件づけることはできない。
 - 社長もあさって頃は帰ってくるだろうから、社長の意見もちょっと訊いてみることにしよう。
7. 事実や現象をありのままに描写する時にだけ使われる「ので」は主観的な判断を表す「のだ」「のです」に続かない。
 - 私が結婚するのだから、私が挨拶するのが当然だ。
 - *お天気になった {のな/のです} ので…

以上のことから、永野は次のように結論付けている。(p.38)

以上、『から』と『ので』との用法の特性を分析することによって、両者の意味の特質を解明しようと試みたのであるが、ここに結論として、今まで述べたことをまとめておく。(本文中略)

『から』は、表現者が前件を後件の原因・理由として主観的に措定して結び付けられる言い方、『ので』は、前件と後件とが原因・結果、理由・帰結の関係にあることが、表現者の主観を超えて存在する場合、その事態における因果関係をありのままに、主観を交えずに描写する言い方である。

また、国立国語研究所の『日本語の文法(下)』(1981, p.46)を調べてみると、永野と同様に主観的か客観的にかによって両者の違いが表されている。

『から』は後件に対する理由や根拠を主観的に説明するものであり、いわば後件がテーマで前件がその解説である。『から』で結び付けられる前件・後件は、元来二つのものであって、それが話し手の主観によって原因結果、理由帰結の関係で結び付けられる。さらに言えば、その結びつきは話し手の判断作用によるものであるから、それについては話し手の主観が十分の責任を持つ、という意味合いのものである。

『ので』は事柄のうちに因果関係に立つ前件・後件が含まれていて、それをありのままに、客観的に描写する場合に使われる。因果関係に立つ事柄は二つのものであっても、その全体を一つの事態（一連の事件）として、何の主観的な変更も加えずに叙述する。裏から言えば、『ので』で結び付けられるものについては、主観の責任がない、という意味合いのものである。

3. Brown and Levinson (1978, 1987)による丁寧さ (politeness)

3-1. 丁寧さ (politeness)と面目 (face)

まず、Brown and Levinsonは発話行動において話し手が聞き手とやり取りをする時の行為を、聞き手の面目(face)を脅かす行為であるとし、「面目(face)」(p.61-62)と「合理性(rationality)」(p.64-65)の主張に基づいて、言語学的な丁寧さ(linguistic politeness)を次の2つに分けることができると考える。¹⁾

1. 消極的な丁寧さ(negative politeness)：聞き手の領域を侵害しないこと、聞き手と隔たりを作ることによって敬意を表すもの
2. 積極的な丁寧さ(positive politeness)：聞き手を良いと認めたり、聞き手に親密さを表すもの

元々、「面目」という概念はGoffman (1967) から来ており、それを Brown and Levinson が発展させた。彼らの主張では「当惑するとか、恥をかくという行為は『面目を失うこと(losing face)』であり、習慣的行為(ritual)としての丁寧さであるとされ、相互行為において『面目を維持すること(maintaining face)』は一般に認められた丁寧さの概念において中心要素である」としている。(p.61)

<Face> Our notion of 'face' is derived from that of Goffman (1967) and from the English folk term, which ties face up with notions of being embarrassed or humiliated, or 'losing face'. Thus face is something that is emotionally invested, and that can be lost, maintained, or enhanced, and must be constantly attended to in interaction. (Brown and Levinson: 1978)

また、彼らは面目の一面を「基本的願望(basic wants)」として考え、面目も丁寧さに対応して次のように二つに分けられている。(p.62)

1. 消極的な面目(negative face)：自分の行動が他人に邪魔されないような「有能な大人の一人(competent adult member)」でありたいという願望
2. 積極的な面目(positive face)：自分の願望が少なくとも他人にとっても望ましいものであるという願望

話し手はみなこの両方の面目を持ち、お互いの感情に左右して、これを失ったり、維持したり、逆に失われたり、維持されたりしながら会話を進めているのである。すなわち、コミュニケーションとは単に言葉という手段を用いて意志や情報を伝達しているだけではなく、会話をしながら、この面目に関わる相互行為をも継続しているのである。

例えば、母親が子供に「食事前に手を洗いなさいよ。」と命令をすると、子供は母親によって何かをさせられるというある種の拘束を受ける。従って、このような命令は人に何かを強制されたくないという聞き手の「消極的な面目」が脅かされる発話行為であると言える。また、その時子供が母親に向かって「何度も言わなくても分ってるよ！」と不平を言うと、母親にとって『私はしっかりしつけをしている良い母親だわ』という良いイメージが損なわれると感じるので、人に良く思われたいという聞き手の「積極的な面目」が脅かされる発話行為であると言える。

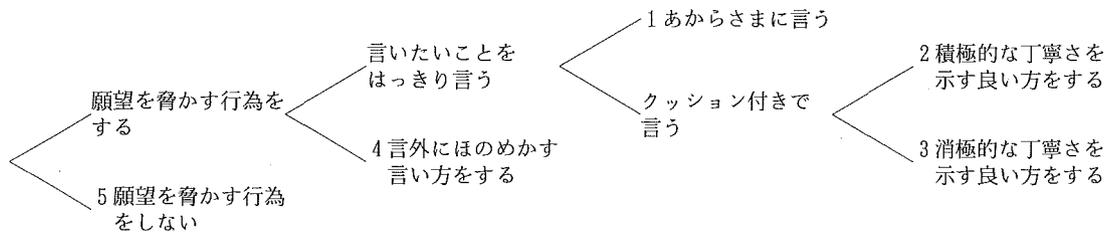
それゆえに、私達は無意識のうちに（意識的にする場合もあるだろうが）円滑なコミュニケーションをするには、聞き手や場面によってどのような言い方をすればよいかを判断しながら会話を進めているのである。もちろん、会話というのは相互行為なので、両者が話し手になったり聞き手になったりしながら、お互いに面目を脅かさないように会話を進めている。では、話し手は聞き手の面目を脅かさないようにするために、どのようなストラテジーを用いているのだろうか。

3-2. 面目を脅かす行為 (face-threatening acts: FTAs)

次に、面目を脅かす行為（以下 FTAs）について考察する。Brown and Levinsonは会話における「丁寧さ」の言語学的説明として、基本モデルを【表 I】のように示す。

1はFTAsを最大に、5は最小にするためのストラテジーである。

【表 I】 面目を脅かす行為に応じたストラテジー (p.69)²⁾



2の「積極的な丁寧さ」では、話し手がFTAsを最小限にしよう、又は避けようと努力することによって聞き手の領域や行動の自由を認めている。3の「消極的な丁寧さ」では、話し手が聞き手の自己イメージを認め、それを正当化することを示している。つまり、話し手は聞き手の面目と自己イメージ、そして自分の面目と自己イメージを気遣って、様々なストラテジーを使ってこれらを守ろうとする。それゆえに、スムーズでより良いコミュニケーションをするためには、話し手と聞き手がお互いの面目を維持することを常に念頭に置いておかななくてはならないのである。

これらのストラテジーの選択は話し手の面目を脅かす危険度によって決定される。その危険度は次の3つの要因によって評価される。(p.74)

1. 話し手と聞き手に対する相対的な力関係（地位の差など）：the 'social distance'
2. 話し手と聞き手の社会的な距離（知人か初対面かなど）：the relative 'power'

3. その文化におけるFTAsの深刻さのランク：the absolute ranking of impositions in the particular culture

例えば、会社で上司と話す場合と家庭で妻や子供に話す場合では、この「丁寧さ」のストラテジーは全く違ったものとなるであろう。また、テーブルの上の塩を取るなど簡単な依頼をする場合と、明日までにこの見積書を作成するなど時間のかかる複雑な仕事を頼む場合など発話内容によっても異なった話し方になるであろう。

そこで、次にこれらの3つの要因によるストラテジーが日本語の表現にも大きく影響しているという仮説をもとに、留学生用テキストに使われている例文とドラマのシナリオや漫画における日常的な会話が「丁寧さ」のストラテジーにどのような関係があるかを検証する。

4. 調査・検証

4-1. Pilot Test

まず、「から」と「ので」の意味と用法の違いは、Brown and Levinson が主張する「丁寧さ」のストラテジーを選択するために考えられる3つの要因のうち、1と2が異なるために起こるという仮説を立て、実際に例文を作って検証する。(3の要因は異文化間での相違についてのみ考察されるので、ここでは省く。) また、それぞれの場面を「親密形」「丁寧形」と呼ぶことにする。

親密形 ① 話し手と聞き手の相対的力関係が小さい。(同僚、クラスメイトなど)

② 話し手と聞き手の社会的距離が小さい。(親しい間柄)

丁寧形 ① 話し手と聞き手の相対的力関係が大きい。(上司と部下、先生と生徒など)

② 話し手と聞き手の社会的距離が大きい。(親しくない間柄)

まず、2で用いた留学生用テキストから「から」と「ので」の例文をそれぞれ親密形と丁寧形に分類し、検証する。

1) 「から」

- ・スープが熱いから、気をつけて持っていきなさい。(親密形)
- ・納豆はきらいだから、食べたくないんです。(親密形)
- ・(駅のホームで) 電車がまいりますから、ご注意ください。(親密形)
- ・A：どうして冬が好きなんですか。B：スキーができるからですよ。(親密形)
- ・この箱、捨てないでね。後で使うから。(親密形)

2) 「ので」

- ・昨日は2時まで寝られなかったので、今朝は早く起きられませんでした。(丁寧形)
- ・お風呂が熱いので、少し水を入れました。(丁寧形)
- ・冬休みに家族に会いました。みんな、元気だったので、安心しました。(丁寧形)
- ・あしたは休みなので、友だちと映画を見に行きます。(丁寧形)
- ・すみません。ちょっと寒いので、まどを閉めてくださいますか。(丁寧形)

・今、調べていますので、少しお待ちください。(丁寧形)

この検証から次のことが言える。

1. 「から」の例文では聞き手が親しい間柄であると考えられる。「電車がまいりますから、ご注意ください。」は駅長が乗車客に対して親しさを表している親密形と考えられるが、これは「電車がまいりますので、ご注意ください。」と丁寧形でも言うことが可能である。
2. 「ので」の例文では聞き手が親しくない間柄であると考えられる。「お風呂が熱いので、少し水を入れました。」の場面設定としては、留学生がホームステイ先でホストマザーに述べていると考えられる。自分の家で子供が母親にこのような話し方をするのは不自然であるし、後の文が丁寧形「ました」なので聞き手が親しくない間柄だと言える。

そこで、これらの例文の「から」と「ので」を入れ替えたらどうなるだろうか。まず、「から」を「ので」に替えると、「納豆は嫌いだから…。」は「嫌いなので」にすると正文になる。「スキーができるからですよ。」は「*スキーができるのでですよ。」となり非文になるが、これは文法上の問題であって「スキーができるので。」とすれば正文になる。つまり、「から」の文はほとんど「ので」に言い換えることができると言える。同様に、「ので」を「から」に替えると、すべて正文になるが、次の2文は失礼な表現になる。

- ・すみません。ちょっと寒いから、まどを閉めてくださいませんか。
- ・今、調べていますから、少しお待ちください。

このような依頼表現は、話し手と聞き手の相対的力関係が大きくて、社会的距離が大きい場合、つまり親しくない間柄では使われない。もしこのような話し方をしたら、聞き手は非常に不快に感じるだろう。だからと言って、話し手と聞き手の相対的力関係が小さくて、社会的距離が小さい場合、つまり親しい間柄であったとしても、後文が「くださいませんか」や「ください」のような丁寧形なので、やはり不自然に聞こえる。しかし、これらの後文を次のように親しい口調に変えると自然な文になる。

- ・ねえ、ちょっと寒いから、まどを閉めてくれない。
- ・今、調べてるから、ちょっと待ってよ。

この結果から、「から」は親しい間柄での会話で、「ので」は親しくない間柄での会話でと使い分けられているのではないかと考えられる。

4-2. 身近な題材による検証

次に、先程の「から」は親しい間柄での会話で、「ので」は親しくない間柄での会話でと使い分けられているという仮説を実証するために、ドラマのシナリオや漫画における日常的な会話の中では「から」と「ので」がどのように使い分けられているかを検証する。(東ラブ：『東京ラブストーリー』、林檎Ⅱ：『ふぞろいの林檎たちⅡ』、職員室：『職員室』より抜粋)

1. 「から」

①親密形：友人→友人（元同級生）『東ラブ』

三上：完治は動物育てるのうまいから、ああいう女が寄ってくるんだ。

カンチ：ドーブツ… なんだそれ。

三上：野性的な女だろ アズサも彼女も…

②親密形：男友達→女友達（元同級生）『東ラブ』

カンチ：関口さんってやさしいから、「永尾くんなんて嫌いだから会いたくない」とは言えないだろ？

関口：えーっ。どうして？ あたしが永尾くんを嫌いなはずないじゃない。

③親密形：課長→部下『林檎Ⅱ』

課長：いやあ、うどんぐらいにしとくどいいんだけどねえ、昼間は。

コレステロールとか、なんやかんやいわれてるから、スタミナ井なんかよくねえんだけど、うちの会社は、いつ力仕事するか分らないからな。

（中略）それで今朝なあ。

部下：はい。

④親密形：母→息子『林檎Ⅱ』

母：（パジャマ姿で階段の方から現われ）あら食べてた？

息子：（インスタントコーヒーとパンをかじっていて）そりゃ、食べるよ。

飯抜きでやれるような仕事じゃないんだから。

2. 「ので」

①丁寧形：元社員→元会社の会長『東ラブ』

（カンチの社長が以前勤めていた大企業の会長に会って引き抜きを打診されるが…）

社長：せっかくですが、会長… 私は一匹狼が性に合っているようです。

それに… 最近けっこう骨のありそうな新人を見つけて…

今はしごいてる最中ですが… 養わなければならない社員もいますので…

会長：そうか… 残念だが あきらめるか。

②丁寧形：校長→先生『職員室』

校長：津田先生に担任をお任せしたんですが、先生の教育方針があまりにも本校とかけ離れているので、私どもも困っているんだよ。

矢崎先生：（黙って津田先生を見る）

4-3. 丁寧さのストラテジーによる親密形と丁寧形

では次に、なぜ「から」と「ので」が親密形と丁寧形に分類されるのかを分析する。

3で述べたように、人間は、円滑なコミュニケーションの為に、無意識のうちに話し手が聞き手に示す心配り、つまりその状況に合った「丁寧さ」のストラテジーを選択しながら会話している。従って、日常のコミュニケーションにおいて、伝達内容そのものはもちろんのこと、それを聞き手にどのような言語表現で伝えるかということも極めて重要になっ

てくるのである。聞き手や場面や発話内容に応じて、どのストラテジーを使って「丁寧さ」を表現するのが適当であるかについては、話し手と聞き手の文化や社会によって異なるが、社会的立場の上下関係を重んじる日本では、相手と距離を保つストラテジーがよく使用されている。

そこで、なぜ「から」と「ので」の使い分けがなされるかについて、今までの検証から考察する。聞き手が親しい間柄であるときには「から」を用い、聞き手が親しい間柄ではなかったり、聞き手に対して敬意を示したいときには「ので」を用いて原因・理由を表しているという結果から、話し手は聞き手との関係がどの程度親しいと感じているかを無意識に伝達していると考えられる。そこで、話し手が「から」の文を使った場合、発話しながら『あなたは私と親しい間柄ですよ。』というメッセージを送っていると言える。反対に、「ので」を用いて話したときは『礼儀正しく話している』とプラスに捉えられる場合もあるし、「から」を好んで使う聞き手にとっては『なんだかよそよそしいなあ。』とマイナスに捉えられる場合もある。例えば、丁寧に日本人の友達に敬語を使っていると、「なんか他人行儀だなあ。もっと気楽にしゃべってよ。」と言われたことがある留学生もいるだろう。つまり、私達は無意識のうちに、会話をしながら相手や場面や発話内容に応じて表現の使い分けをすることによって、聞き手との関係をどのように捉えているかというメッセージを送っているのである。よって、「から」と「ので」の意味と用法が異なるのは、「丁寧さ」のストラテジーが根底にあると言える。では、永野説の主観的か客観的かによる分類と「丁寧さ」のストラテジーによる分類は全く別の視点なのであろうか。

4-4. 「永野説」と「丁寧さ説」の関係

Brown and Levinson における「丁寧さ」とは、相手の領域を侵害しないように、相手との隔たりを作ることによって敬意を表す「消極的な丁寧さ」と相手を良いと認めたり、相手に親密さを表す「積極的な丁寧さ」の2種類がある。

一方、永野説では「から」を表現者が前件を後件の原因・理由として主観的に結び付ける言い方、つまり主観的な言い方であり、「ので」を前件と後件をその事態における因果関係をありのままに主観を交えずに描写する言い方、つまり客観的な言い方であると述べている。

まず、永野による「主観的」な表現である「から」は Brown and Levinson における「積極的な丁寧さ」と結び付けられる。例文を見てみよう。

1) ・親密形：友人→友人（元同級生）

三上：完治は動物育てるのうまいから、ああいう女が寄ってくるんだ。

永野の議論によると、この前文「完治は動物を育てるのがうまい」を後文「ああいう（動物的な）女が寄ってくるんだ」の原因・理由として、話し手が主観的に結び付けていると考えられるが、実際はそうではなく、この発話は、相手を良いと認め、相手に親密さを表すために「積極的な丁寧さ」のストラテジーを用いているからこそ、「から」が使わ

れているのだ。

同様に考えると、永野による「客観的」な表現である「ので」はBrown and Levinsonにおける「消極的な丁寧さ」と結び付けられる。

2) ・丁寧形：校長→先生『職員室』

校長：津田先生に担任をお任せしたんだが、先生の教育方針があまりにも本校とかけ離れているので、私どもも困っているんだよ。

永野の議論によると、原因・理由である前文「津田先生の教育方針があまりにも本校とかけ離れている」と結果である後文「私どもも困っているんだよ」を、その事態における因果関係を客観的に描写しているということだが、校長自身が困っているという事実を客観的に描写しているとは考えられない。そこで、「丁寧さ」の視点から考えると、校長は「津田先生の教育方針があまりにも本校とかけ離れている」という理由で「退職してくれ」と言いたいところだが、相手の領域を侵害しないように「消極的な丁寧さ」のストラテジーを用いて、「私どもも困っているんだ」と表現を和らげていると言える。

つまり、永野説の「主観的か客観的か？」の議論は「から」と「ので」の文の表面だけ見て論じているが、本来、人間の発話行為は単に情報伝達するだけではなく、その発話を通して様々なメッセージを送っているということに目を向けなくてはならない。つまり、発話された文の一部に焦点を当て「なぜ相違が生じるのか」を議論するのではなく、『どんな状況で、どんな聞き手に対して、どんな内容の発話がなされるのか』という視点で考えなくてはならないのだ。

5. 結 論

以上のことから、原因・理由の接続助詞「から」と「ので」の意味と用法の違いは、永野を始め多くの言語学者が議論してきたように、主観的か客観的かによって分けられるのではなく、聞き手や場面や発話内容に応じて表現の使い分けをするという Brown and Levinson の丁寧さのストラテジーによって生じると言える。言語について議論するときには文法だけに焦点を当てて論じるのではなく、社会的な側面にも目を向けて考察しなければならない。

留学生から時々、「この表現は文法的に正しいのに、なぜ誤解が生じたのか。」と質問を受ける。例えば、「帰ろうとしている先生に『ご苦労様でした。』と言ったら、変な顔をされました。」というのは、日本語の丁寧さのストラテジーをまだ完全に習得していない結果に起こった誤用であろう。つまり、言語の学習というものは、書物の上だけではなく、実際の生活で使えることができて始めて習得したと言えるのではないだろうか。

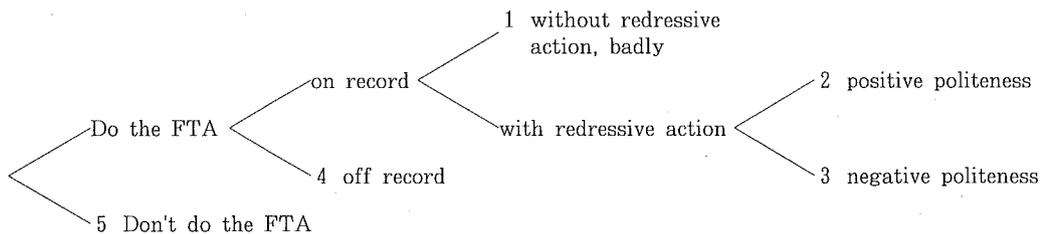
現在出回っている留学生用テキストのほとんどは、文法中心の説明がされているだけである。しかし、今まで見てきたように、文法だけを教えるのは片手落ちであるということ教師は認識しなくてはならない。留学生が日本人相手に流暢な日本語でコミュニケーションできるようになるためには、日本人である教師が丁寧さのストラテジーなど日本文化に

基づいた社会的側面をも教える必要があるのではないか。

注

1) 井上 (1999) によると「基本的に人間はこの2つに対応する願望 (Brown and Levinson はこの願望を面目 (face) という概念を用いて説明している) をあわせ持っており、前者に対しては、人に邪魔されたくない、何かを強要されたくないという願望、つまり自らの独立性を保ちたいという願望であり、後者に対しては、人によく思われたい、人と仲良くしてもらいたいという願望、つまり人との連帯を得たいという願望である。」この考えから、井上は両者をそれぞれ「独立の丁寧さ (independence politeness)」、「連帯の丁寧さ (solidarity politeness)」と呼んでいる。

2) 「面目を脅かす行為に応じたストラテジー」のそれぞれの英語は以下のようなものである。



引用文献

- 鎌田 敏夫・畑 嶺明. 1997 『職員室』 東京：日本文芸社.
柴門 ふみ 1995 『東京ラブストーリー』 1～5巻, 東京：小学館.
山田 太一 1985 『ふぞろいの林檎たち』 I～III, 東京：大和書房.

参考文献

- Trosborg, Anna. 1987 "Apology Strategies in Natives/Non-natives." *Journal of Pragmatics* 11, pp.
——— 1995 *Interlanguage Pragmatics: Requests, Complaints and Apologies*. New York: Mouton de Gruyter.
Brown, Penelope & Levinson, Stephen C. 1978 "Universals in Language Usage: Politeness Phenomena." In E. Goody, ed. *Questions and Politeness*. Cambridge: Cambridge University Press.
——— 1987 *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
Coulmas, Florian. 1981 " 'Poison to Your Soul' Thanks and Apologies Contrastively Viewed." *Conversational Routine: Explorations in Standardized Communication Situations and Prepatterned Speech*. The Hague: Mouton Publishers.
今尾ゆき子 1991 「カラ、ノデ、タメーその選択条件をめぐる一」, 『日本語学』 10:12 78-89,
井上 逸兵 1999 『伝わるしくみと異文化間コミュニケーション』 東京：南雲堂.
国立国語研究所 1981 『日本語教育指導参考書5 日本語の文法 (下)』 東京：大蔵省印刷局

- 森田 良行 1985 『誤用文の分析と研究 —日本語学への提言—』 東京：明治書院。
- 1989 『基礎日本語辞典』 東京：角川書店。
- 永野 賢 1952 「『から』と『ので』はどう違うか」, 『國語と國文学』 29:2 30-41,
- 1988 「再説・『から』と『ので』はどう違うか—趙順文氏への反批判をふまえて—」
『日本語学』 7;12 67-83,
- Nancy, Bonvillain. 1993 *Language, Culture, and Communication: the Meaning of Messages*,
Englewood Cliffs, Prentice Hall.
- 沼田善子, 杉本 武, 1986 『いわゆる日本語助詞の研究』 東京：にほんごの凡人社。
- 酒入 郁子 他 1991 『外国人が日本語教師によくする100の質問』 東京：バベル・プレス。
- 鈴木 一彦 編 1984 『研究資料日本文法 ⑤助辞編（一）助詞』 東京：明治書院。
- 趙 順文 1988 「『から』と『ので』—永野説を解釈する—」, 『日本語学』 7. 63-77,
- 友松 悦子, 宮本 淳, 和栗 雅子 2000 『どんなときどう使う 日本語表現文型200』 東京：アルク

